

ヴェルディ・オペラ第9作目「アッティラ Attila」研修会

於 2024/01/28 「ウイングス京都」

お話し 錦職昭彦

「アッティラ」の初演は1846年3月17日ヴェネチア・フェニーチェ劇場で行われた。この愛国的オペラを観覧した市民層は自由への欲求、祖国統一を声高らかに熱狂、劇場は湧いた。

プロローグで、アッティラとエツィオの二重唱で有名なセリフがある。エツィオがアッティラに”あなたに全世界をゆだねる。だがイタリアはわたしに残してくれ”と言う愛国的な言葉で訴える。

それともう一つのテーマ、キリスト教世界と異教徒＝アッティラ軍との戦いである。イタリア北東部アドリア海を望む街アクイレイア Aquileia（地図で見るとヴェネチアよりトリエステに近い）に攻め込んだアッティラ軍は、次なる目標、神の国ローマへの侵攻である。アッティラ軍の侵攻をどのようにして踏み止めたか。

452年アクイレイア侵攻後、数週間が過ぎたある夜アッティラは不思議な夢を見る。そして、その不思議な夢を部下に聞かす。・・・恐ろし気な老人（実はローマ教皇レオ1世）が現れ、わしの髪を掴んだ。わしは気が動転し、剣にかけた手は凍りついた。老人はわしに笑いかけ、こう言った。”おまえが鞭を振る相手は人間だけに限られておる。手を引け！もう道は閉ざされた。ここは神の地だ！”・・・アッティラは圧倒され、神にひざまずく。この二つのテーマ、激しい独立精神と祖国統一、崇高なラテン民族の勝利がオペラ「アッティラ」の主テーマで劇が展開される。

さて、ヴェルディはこの時期、健康面、対人関係等で依然として優れない。リューマチ、胃腸の痛みを堪え忍が、遅々として作曲が進まない。前作「ジョヴァンナ・ダルコ」、「アルツィーラ」の二の舞はできない。新しい感覚でオーケストラ・パート、アリアを導入することを考え実行した。対人関係では、ミラノ・スカラ座支配人B・メレッリ、リコルディ出版社とも仲たがいし、この作品はリコルディ出版社と競争相手のルッカ出版社（ルッカ夫人・拙著「ヴェルディ」P154～詳しく著している）との契約である。この時期のヴェルディについて後世の人たちはいろいろなことを言っているが、G・ストレッポーニとの仲が深く進行していったことが主原因であると思う。

台本は当初F・M・ピアーヴェに依頼するがT・ソレーラに変更され第1幕、第2幕まで順調に書かれ、ヴェルディを満足させていた。しかし、そのソレーラが自分勝手な都合でスペインへ逃避した。（この辺の事情はわが師永竹由幸氏の「ヴェルディのオペラ」音楽之友社、P136に詳しく著されている。）結局、元のピアーヴェが第3幕を引き継ぎ書いたがヴェルディが思い描いていたイメージ、ダイナミックな盛り上がりには欠けたまま終結している。

いずれにしても、ヴェルディは原作「アッティラ、フン族の王」1808年ツァハリアス・ヴェルナー(Zacharias Werner 独)著を読み、外部から激しく容赦なく攻め込むアッティラだが、最後はあっけなく死んでゆく敵将アッティラをオーストリア・ハプスブルグ家と見立